
迎え猫

紅月 セイル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
迎え猫

【Nコード】
N0639L

【作者名】
紅月 セイル

【あらすじ】
その猫はいつも僕の家周りに出没する。
少し斑模様まだらの顔と尻尾と真っ白な体。
雌雄もわからないし、名前も付けていない。
でも付き合いは長かった。

いつも出迎えてくれるあいつの話です。

その猫はいつも僕の家の中に出没する。
少し斑模様まだらの顔と尻尾と真っ白な体。
雌雄もわからないし、名前は付けていない。
でも付き合いは長かった。

元々うちの周りに出没していたのは別の猫だった。
全身真っ白な白猫。
そいつはうちに飼っていた猫は死んで1年ほどしてから現れた。
飼い猫がいた小屋の前に。

野良だった綺麗な白だったのを覚えている。
いつも学校から帰ると玄関の横で
「おかえり」
とでも言うようにちょこんと座っていた。
それは小屋からいつも僕に
「おかえり」
と顔を覗かせていた飼い猫を思い出す光景だった。
日曜日には家の前に止めている車の下に潜り込んで寝ていた。
一人で気持ちよさそうに。

数年経った頃だった。

白猫は一人じゃなくなった。
いつの間にか白黒の猫を連れてくるようになったのだ。
日曜日には二人で昼寝をするようになり二人で出迎えてくれるようになった。

半年ほど経つと二人は現れなくなった。
日曜日に昼寝もしていないし出迎えもなくなった。
ほぼ毎日見ていただけあってそれは少し物足りない光景だった。

しかし、さらに半年が過ぎた頃だった。
ある日曜日、あの白猫は歩いていくのを見た。
慌てて追いかけてみるとそこにいたのは・・・・・・・・、
あの白黒の猫と4匹の子猫だった。

体と尻尾は真っ白で右目の周りだけが黒い子。
全身が白く腹だけが黒い子。
全身が白黒の子。
そして、真っ白い体に少し斑模様の顔と白黒の尻尾の子。
それぞれが固有の、しかし親猫の特徴を持つ模様だった。
僕は静かにその場を離れた。

4匹の子猫が生まれたことを知ってから数ヶ月経つ頃には総勢6匹

の行進をよく目にするようになった。

一番前には父（と思う）白猫。

一番後ろには母（と思う）白黒猫。

間に4人の子猫という並びだ。

出迎えられることは少なくなったが微笑ましい光景が増えた。

1年が経つと子猫達は立派な猫へと成長した。

単独で行動し始め1人でいる所をよく見るようになった。

同時に親猫をあまり見かけなくなった。

また半年が経つ頃には親猫は全く見ることがなくなった。

そして、子猫達もあまり見なくなった。

ただ少し斑模様の顔と尻尾と真っ白な体の猫だけはよく出迎えてくれた。

今では随分大きくなりそいつだけが一人、出入りするようになった。

僕を見ても逃げなくなった。

（といっても少し距離はとられているが）

いつか、こいつもパートナーを連れてくるだろう。

いつか、こいつも親となるだろう。

いつか、こいつも・・・飼い猫や親猫のようにその命を散らすだろ

う。

しかし、こいつの子供がその命に育まれて生きていくだろう。
そしてまた、ここに来るかもしれない。

生命いのちの営みの中で、今日もまたあいつは出迎えてくれる。
あいつは三代目の迎え猫。

(後書き)

迎え猫。

今現在は確か4代目が来てますね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0639/>

迎え猫

2010年10月12日07時45分発行